

高齢化社会に演劇の知恵を、演劇の現場に老人介護の深みを

「老いと演劇」OiBokkeShi

活動の目的

奈義町の高齢化率は30パーセントを超し、日本全体の高齢化率を上回る。世界に類を見ないスピードで超高齢社会を突き進むにあたって、地域住民には価値観の転換が求められている。現代社会ではタブー視されがちな「老い」「ボケ」「死」と向き合うことで、「人間とは何か?」「生きるとは何か?」といった根源的な疑問を抱くことができる。「老い」「ボケ」「死」の深みを通して演劇作品を創造し、地域社会に「老い」「ボケ」「死」を受け入れる文化を創出する。

活動の内容及び経過

・ 演劇講座「老いのリハーサル」

今年度より奈義町全19地区で実施されている地域サロンにて講座を開始。内容は、ジェスチャーゲームや認知症の人との関わりを考えるシアターゲーム等。演劇活動を通じて「介護予防」と「老いの受容」という矛盾しがちな2つの課題に取り組む。来年度に向けて、認知症を題材にした演劇創作の準備、エンディングノートを題材にした演劇ワークショップの開発を行う。

・ 『カメラマンの変態』

12月24日・25日に岡山市・蔭涼寺、1月27日・28日に美作市・特別養護老人ホーム瑠流荘にて、新作公演『カメラマンの変態』を上演。老人ホームで生活をする老カメラマンを主人公にした、生と死、エロスが交錯する時間を描いた物語。来場者は岡山公演100名（2回公演）、美作公演160名（2回公演）。10月から12月まで2ヶ月間、岡山市と奈義町にて稽古。出演は91歳の在宅介護者・岡田忠雄、奈義町国際交流員・ポール・エッシング、青年団所属の俳優・申瑞季。3月23日にニシガワ図鑑にて『カメラマンの変態』（映像：南方幹）の舞台映像上映を行う。

活動の成果・効果

・ 演劇講座「老いのリハーサル」

奈義町全19地区中12地区で実施。ある地区では3回シリーズで開催し、好評を博す。参加者より「みんなの演技が素晴らしく、よく笑った」「認知症の人を地域で見守るためにも大切だ」等の声を頂く。演劇経験のない高齢者がほとんどであったが、この講座がきっかけで演劇に興味を持っていた。来年度はさらに踏み込み、認知症を題材にした演劇創作を目指す。WHO（世界保健機関）が発行する認知症に関するガイドライン、「文藝春秋」等に取り組みが掲載される。

・ 『カメラマンの変態』

関東、四国、九州等、県外からの来場者多数。また、地



域住民、医療・介護、舞台芸術等、異なる分野の来場者が入り交じる。公演では、実在の特別養護老人ホームで上演することができ、超高齢社会における特別養護老人ホームの可能性（「老いの文化拠点」）を提示することができた。来場者からは「人生の最終章まで生き切る大切さがしみじみとわかった」「人の命の儚さと、時の輝きが感じられた時間でした」との声を頂く。新聞・テレビ等のマスメディアに取り上げられ、共同通信が作成した記事は全国の新聞社に配信される。出演者の岡田（91歳）は「これがあるから元気が出るんですよ」と、年々、高度な演技を求められる役に挑戦している。

今後の課題と問題点

・ 演劇ユニットとして自立していくためにさらに活動の幅を広げていく。

- 代表者：菅原直樹 ●所在地：勝田郡奈義町久常
- TEL：090-8045-5175 ●E-MAIL：sekiseita@gmail.com
- URL：http://oibokkeshi.net
- 設立年：2012年 ●メンバー数：7名